

息栖神社と御船祭

ご祭神を導く、12年に一度の船出



鹿島神宮式年大祭「御船祭」の大船団。先導するのは息栖神社の船（外浪逆浦）



息栖神社氏子総代会の猿田会長



折り返しの潮来の船着場河岸を出発する先導船



鰐川橋の下を通過する御座船



鹿島神宮の御座船



息栖神社の先導船

鹿島神宮最大の祭典であり、香取神宮との深い関係をしめす御船祭。勇壮・華麗な水上渡御で、息栖神社の先導船が大船団の先頭に立つ大役を務めているのをご存じですか？ 遠い昔から神事を大切に受け継いできた、地域の人々の思いに迫ります。

12年に一度の式年大祭

9月2日の早朝、「先導船 息栖神社」ののぼりを掲げ、五色の吹き流しや幕、大漁旗で飾られた船が常陸利根川に姿を現しました。鹿島神宮式年大祭「御船祭」の大船団を導くため、大船津へと向かっていきます。この日のために、息栖神社と氏子総代の皆さんは、1、2年も前から準備を進めてきました。

御船祭というのは、鹿島神宮で12年に一度、午年におこなわれる大祭です。9月1日から3日にかけておこなわれる神事の総称で、中でも御神輿を奉載した御座船が、供奉船を従えて香取市加藤洲に渡る水上渡御は、壮麗を極め、水上の御船祭としては国内最大規模を誇ります。その起源は古代までさかのぼり、

『常陸国風土記』に、舟を津の宮（現在の香取市）に納めるという約2000年前の故事が記されています。平安・鎌倉時代には、水上渡御がおこなわれるなど、現在の祭りに近い形がほぼ整えられたようです。戦国時代から江戸時代にかけて船による渡御は途絶えますが、明治3年（1870年）には大規模な御船祭が数百年ぶりに復活し、明治15年（1882年）以降は、12年に一度の大祭として、途絶えることなく今日まで脈々と受け継がれてきました。

氏子の皆さんが守り受け継ぐ

息栖神社の氏子の皆さんがどのような思いで御船祭に臨んでいるのか、氏子総代会会長の猿田信守さんに話を聞きました。息栖地区（1、7番組および息栖原）に住む氏子の中から、9人が順番に氏子総代（任期3年）を務め、総代会を運営しているそうです。まず、御船祭に向けた準備について聞きました。

「総代会の諸先輩にご教授をいただき、資料を見ながら段取りを話し合ってきました。昔からの伝統にのっとり、船の飾り付けの準備、陣羽織や袴など装束の手配を済ませ、



息栖神社